



# 明日

一九四五年八月八日・長崎

井上光晴

集英社

明日 (あした)

一九八二年四月二五日 第一刷印刷  
一九八二年五月一〇日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 井上光晴

装画 堀内菊二

装丁 中島かほる

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇  
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八—二八四二  
電話 販売部 (〇三) 二三八—二七八一

印刷所 共同印刷株式会社

検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1982 M. INOUE

Printed in Japan 0093-772376-3041

明

日

(あした)

人間は私の父や母のように霧のごとくに消  
されてしまつてよいのだろうか。「人間が  
霧になるとき」 若松小夜子・長崎の証言・5

1



城山町の市営住宅に向かう荷車と、石原継夫はしばらく平行して歩いた。護国神社と城山国民学校、それに聖マリヤ学園と北、南、西の方角に位置する砦のように盛り上がった樹木の丘。傾斜地を造成した階段状の台地に、北七条から南五条まで、直線的に配置された家々の何処かに移転でもするのか、家財道具を引く老夫婦は、二分か三分ごとに喘ぐ息を休めた。

「押しまっしょうか」彼はいった。どうして早く気付かなかったのか。

「おおきに」古いワイシャツを腕まくりした男は頭を下げた。「それでも、おいたちはゆつくり行きますけん、どうぞお先に」

「あそこまで行けば楽になりますたい」彼は前方の川べりを指差す。「もう一息ですばい」荷車を押す彼の目先に、要所を新聞紙で保護した電蓄がおかれている。何処からの引越ですか、といいかける胸に早くも痰が詰まり始めた。

道端に耕された埃まみれの畑に、熟した種トマトが一個ぶら下がっていて、車輪の響きでも伝わったのか、ねじれた葉っぱがふらつと落ちた。晴間と晴間のあいだをつなぐ薄い雲を通して、じつとりした光線が低いトタン屋根に照り返り、洗いたての下着を汗はいっぺんに濡らした。

「よかですばい、もう。ほんとに助かりました」

一礼して彼は荷車を離れる。電蓄の傍のボール箱はきつとレコードを収めてあったのだらう、という思いに捉われながら。目差す家はそこからいくらもない場所にあるのだ。

輪の中の石を、自分の親石ではじきだす遊びに熱中する幼児が三人。そのうちのひとりが立ち止まった彼に、「花嫁さんのところに行きなつと」ときいた。

「そうたい」

「花嫁さんの名前ば、うちは知つとるとよ」

「だいね」

「三浦ヤエ。今日から中川ヤエにならすと」

「利口か」彼はいった。「あんなもいつか、きれいにお嫁さんになって、名前を変えにやならんとよ」

「うちはゲートルば巻けるつちゃん」もうひとりの子どもが口をとがらせて割り込む。

「右の足も、左も、きちんと巻けるとよ」

「利口かもんばかり遊びよつとたい」

小さなもんぺをはかされた幼児を後に、石原継夫はどういうわけかその辺りだけ砂利のむきだした道路を横切る。「こらした」という声がかきこえたが、自分にかけられたものではなかった。

風はなく、樹木の日蔭に入るとかえって汗が吹きでた。平家の上に木箱でものせたような二階家の窓に顔だけだした年寄りがいる。行手の縁側にぼんやりと足を投げだして坐った男が、そのままの姿勢で真新しい戦闘帽を脱ぐと、びよこんとお辞儀をした。

「暑かですねえ」彼はいった。

車輪のないリヤカーをたてかけた家の玄関を丁寧な手つきで開いて、封書か葉書を投げ入れた少年配達員の頬が目立つほど赤い。

「こらしたばい、だいか」

今度ははっきりと自分を差す声を横合いに、彼は石段を踏んだ。

古びた柱時計の下に画鋏で留めた曆は、昨日の日付になっていた。一枚めくったものを掌の中でまるめる途中、彼女の目先を胴体の太い蚊がよろよろとかすめる。

「警戒警報解除ね」という言葉に幾人かの人が笑い、少し間をおいて和した列席者の声にもまた福永垂矢はついていけなかった。

「何事のあつたのですか」と玄関先に首を突込んだ年輩の巡査に「祝言ですたい」とひとりが答えた。「まあまあ、そりゃ。こげん時に」と要領を得ない頷き方をして去った巡査に対して笑いはでたのだが、彼女の気持はもうひとつ、別のところに蹲っていた。

高谷藤雄のいい残した帰宅予定はすでに四十日余も過ぎており、妊娠したのだとはつきり自覚してからの時間と殆ど重なっていた。三菱長崎造船所より呉海軍工廠へ派遣される「大島班」の一員として四月二十五日に出立する際、出張期間は二カ月、遅れても六月一杯には長崎に戻ってくると、彼は明言したのだ。

三日前の宿直明けにも、彼女は高谷藤雄の家を訪ねていた。川南造船所社宅に近い丘陵地の二階家で、目の不自由な母親と会うのは二度目であつたが、最初の時よりも一層とげとげしい態度に接しなければならなかつた。玄関先から一步も奥に入れようとせず、上が

り口に立ちほだかるような様子で坐り込んだ五十過ぎの女は、ものをいうたびに顎を上向かせた。

「藤雄はお国の御用で呉に行つととですけんね。どげんして呉に行つとるのを知りなかつたかしれんばってん、ほんなこつは呉に行つとるともいうちやならんとですよ」

「今も呉におられるのはほんとでしょうか。そういう便りでもありましたですか」

「おうちにどうしてそんなことまでいわにやいけんね」

「呉におられるのかどうか、それだけでもわかればよかとですよ。長崎に戻る日にちはこれこれだときいて、その日からもう四十日も過ぎとりますもんね」

「おうちはどうだった関係のあるといわるつとね。藤雄が何日の日に帰ろうと、いちいちそれを教えにやならんわけでもあつとやろうか。うちはそれをきいとると」

「戻つてきなさる日は何時か、それじゃわかつととですんね」

「知らんとよ、うちは。なんも知らん」膝頭をにじり寄せながら女はいつた。「藤雄からは何もきいとらんとだけんね。おうちのこともほかのこともなんにも。……何時戻るか、おうちに通信のなかとなら、それはそれで藤雄がそう考えとるからでつしよ。あれこれうちの方でいうことはなかとよ。……前ん時もそうやつたばってん、うちにはああたのこと

がようわからんと」

「のつぴきならんことのあつて、一日も早う藤雄さんに相談したかですよ。それで呉から戻んなさる日のわかつとつたら、それだけ知リたかと思つて……」

藤雄の母親は大きく頭を振ると、やや前かがみに片方の腕で畳を支えた。

「のつぴきならんことというのは何やるか。よしんば藤雄が、仕方のなかけんそうしようというても、そうはいかんとよ。猫や犬の子じやなかとだけんね。いくら押しつけられたからというて、はいそうですかというわけにはいかんよ」

目の見えん分だけ匂うとも女はいつたが、結局具体的な事柄は何ひとつ明かさなかつた。息子の帰宅が遅れているのをさして苦にしていな母親の様子にのみ、すがりつくような足どりで、彼女は帰りの坂道を下リた。それにしても高谷藤雄はなぜ連絡の葉書一本寄せないのかといぶかりながら。

午後一時三十分という所定の時刻までしばらく間があつて、開け放たれた縁側の先になすの葉がばらばらにしおれていた。風はなく、青臭い湿気がかすかに流れるのは焼夷弾防備のために取り外された天井板のせいであろう。天候の明るさを映して浦上川は岸辺を影に照り輝き、大橋町の方角から時折り腹に響く鈍い工場の機械音がきこえた。

「あっちこっち空家になつとるごたるが、勿体なかとすね」

「疎開した者の家に、町中まちなかのもんが疎開してきよつたりして、わけのわからんごつなつとりますと」三浦泰一郎はこたえた。この家の主人で花嫁の父親でもある、彼の心中はひたすら長女の出産にかかつていた。今もつて姿をみせぬ妻が成行きの困難さをあらわしていたし、呼出し電話で確かめる手間を考えれば、このまま待つてゐるのがむしろ望ましいともいえた。

選りにも選つてこんな日に、という気持ちに、母体だけでも無事ならまだ取返しがつくと、不吉で余分な思いが侵入してくる。

「市営住宅の空家というたらどげんことになりますかね。矢張り市役所に申し込みにやいけんとやるか」

「自由勝手にやつとるみたいですよ。市役所でももう一軒一軒のことには手の廻わらんでつしよ。又貸しの又貸しで、焼けだされた者がああた、勝手に空地ば見つけてバラックを建てよりますもんね」

「うちの辺はまた播鉢小屋というを作りよんなさつとよ。八月一日の空襲でやられた者ばかりだけん、文句もいえんとぼつてん、真ん中に電柱のごたる木材ば一本立てて、トタ

ンじゃろうとブリキじゃろうと、まわりをぐるっと囲んで、これがおいたちの家じゃと、いいよんなはつと」

「播鉢のことはきいたことのあつとよ。両手ばひろげて、此処から此処まではおいの家じゃというたら、そうなるらしかたたい」

「そがんふうには勝手にはいかんですばつてんね。P 51にバラバラ撃たれて、何もかもやられて、髪振り乱しとる人に、住むとこの何処かなかやろかといわれたら、どう仕様もなかとよ。そこはおいの土地じゃからというても、それがどがんとねと開き直られたらお仕舞いですもんね」

「ありやひどかった。B 29ならまだ防空壕に入つとればなんとかなるばつてん。ピーンときていきなりバンバンじゃ逃げようもありまつせんと。八月一日の時、うちはちようど眼鏡橋のところを自転車に乗って行きよつたとですよ。そしたら、ヒューンとB 24やらPの編隊がきて、ヒューン、ヒューン、後から後からくつとでつしよが。死んだかと思ひよりました。機関銃だけじゃなかですもんね。爆弾もばんばん落ちてきて、火柱は上がる。ひよつと見ればクレーンの附近も燃え上がつとるし、いっぺん音の消えたと思うたら、もうそんなのPは税関の上にありますと。……」

客たちのやりとりに落付きと精気が半ば失われているのは、今すぐ鳴り響くかもしれぬ空襲警報のサイレンと、ひと組の夫妻の際立つ服装のせいであつた。

新郎中川庄治の今は亡き母の連れ合い、つまり義父に当る男と現在の妻であつたが、紋付きの羽織袴、裾模様は銀糸の鶴を配した黒い留袖という一對の鮮やかさ。暑さの内側にもうひとつ淬のたまつたような暑さの中の重ね着だ。

新郎の友人として、唯ひとり出席している石原継夫は、胸に名札をつけたスフの半袖シャツと親類から借り受けただぶの冬ズボンを身につけていた。どちらも洗濯こそしていたが、何ともちぐはぐな恰好を今更後悔しようもなかった。

新婦の叔父夫婦も、よれよれの国民服と季節には厚すぎる柄物のもんぺを着用していた。「みんな疎開してしもうて」とは、客のすべてに通じる弁明になつていたが、おつかつのも身なりをした客の中で、いづれにせよ銀糸に彩られた留袖は、異常とも思えたのだ。

「いくらなんでも、烏賊の塩辛をめしの代りには食えまつせんもんね……」

妻の遅刻に苛だつた三浦泰一郎の耳に妹のねばりつくような声が入ってきた。

「十三さんという下駄屋をしとらしたひょうげもんのおらして、そん人がそんな時にいうたことがおもしろかつた。塩辛を米の代りにすつとなら、お菜はやっぱ米にせにやならん

ですばい」堂崎ハルは誰彼を見廻わすようにしてつづけた。「町内の人も、それから市役所からきた人もおんなつたのに、すばつといわしたもんだけん、笑うに笑われず、ほんなこつあげんおかしかことはなかつたよ」

「烏賊の塩辛は米の代りに配給さしたとですか」江上春子はいった。花嫁側の友人で看護婦養成所時代の同期生を代表する形で出席していた。

「ジャガ芋の足らんごととなつたけん、塩辛で辛抱しろということたいね」堂崎ハルはいった。「なんでうちたちの町だけ塩辛になつたとかときいたら、勝山だけじゃなか、この辺一帯は全部そうたいといいよらしたばってんね。なんてことはなかとよ、後で確かめよつたら、塩辛の配給は勝山だけというじゃなかね」

「塩辛とジャガ芋と一緒に配給してくるつとなら、まだ足しになりますばってんね」水本満江はいった。「ジャガ芋の代りに塩辛じゃどうにもならんとでつしよ」

「そいで、一日分として、どん位の配給のくつとですか」首筋の汗に手拭いをあてながら水本広はいった。「塩辛のことばききよとでつしたい」

「ああ塩辛」堂崎ハルは音だけの団扇を畳におき、指先で瓶の輪を作った。「こん位の瓶で二食分ですたい。咽喉ばつかり乾いて、お茶を何杯飲もうと、茶腹じゃ腹の足しにもな